地域における「学校美術館」の実践（1）

－「学校美術館」の意義と実践事例－

The Practice of “Art Museum at School” in the Area（1）

辻　泰秀*・清水英樹**・新實広記***・林和貴子****

Yasuhide TSUJI*, Hideki SHIMIZU**, Hiroki NIIMI*** and Wakiko HAYASHI****

１．はじめに

1990年代以降，美術教育において学校美術館という言葉が使用されるようになった。学校美術館は，学校と美術館という異なる施設を結び付けた造語であり，学校を地域に開放して「学校を美術館のようにしよう」という目的から使用され始めた。学校は子どもたちが日々生活し学んでいる場所であり，美術館は美術作品が整然と展示されている社会教育の施設である。学校では子どもたちの声が聴こえ，子どもたちが運動場や体育館で走り回って遊んでいる姿をよく見る。美術館に行くとひっそりとした落ち着いた雰囲気の中で人々がじっと作品を鑑賞をしている光景が目に付く。このように，学校と美術館は，動的と静的，歓声と静寂といった対照的な印象を与えている。異なる印象をもつ施設の名称をあえて結び付けている点に学校美術館の意図が内在している。

ただし，現在では，美術館でも子どもたちを集めて鑑賞教室やワークショップ等の教育普及活動が活発に行われている。学校の授業として美術館を見学するという学校と美術館の連携も頻繁に実施されているので，両者を厳密に色分けすることはできない。近年学校と美術館との連携が強調されている背景には，学校と美術館との間にはまだ隔たりがあり，両者を併せて活用することによって教育的な効果をもたらそうというねらいがある。すなわち，学校美術館という概念は，学校と美術館とを一体化して，より多様な教育の機会をもとうとする考えに基づいている。

２．学校美術館のスタイル

学校美術館は，学校と美術館との関係によって三つのスタイルに分類することが可能であろう。第一は，子どもたちが生活している普段の学校の中に多くの美術作品を展示をするスタイルである。鑑賞のために作品を並べて展示するという美術館の役割を校内において実現しようとする。図工・美術科が表現と鑑賞の二つの領域によって構成されていることからも，作品を鑑賞するというのは図工・美術教育の重要な学習活動である。学校の教室や廊下に作品を展示をし，子どもたちが作品に共感したり作品のよさを学び取ろうとする。美術作品が子どもたちが制作した作品のときがあれば，作家の美術作品のときもある。以前から文化祭や校内作品展で子どもたちの作品を並べて展示したり，大人の寄贈作品を額に入れて飾ることはあった。学校美術館では，作品展示の規模をより大きくしたり，

*　岐阜大学教育学部美術教育講座
**　岐阜県立関特別支援学校中等部
***　愛知東邦大学人間学部
****　岐阜大学大学院教育学研究科美術教育専修

人々に鑑賞活動を広く呼びかける。最近では，ゲスト・ティーチャーとしてアーティストや美術専攻の学生たちを学校に招いて，作品の展示や鑑賞教室を実施する事例が見受けられる[1)]。直接制作者から話を聞き人柄にも接するので，子どもたちは完成作品だけを見たり作品図版を通して鑑賞をするときとは異なる体験をする。アーティストが美術館に完成作品を展示する場合には，搬入と搬出のときに美術館に行くことはあっても，自ら機会をつくらなければ鑑賞者と交流をすることはまれである。学校美術館として学校に作品を展示するときには，展示のプロセスをスタッフや子どもたちと共有する，鑑賞者に作品の意図を伝えて対話を伴う交流をするといった活動が含まれる。作品の展示に加えて子ども・保護者・スタッフとの交流もできれば，アーティストにとっても貴重な経験になる。何をどのように展示するのかについて，教師が全てを決めるのではなく，子どもたちや各アーティストが工夫する試みも行われるようになってきている。

第二は，学校への移動美術館のスタイルである。美術館が学校に美術作品の出前をする。生涯学習社会になっても学校休業日に子どもたちが美術館に足を運んで鑑賞する機会というのは一般的には多いとはいえない。美術館まで距離がある，引率する保護者が多忙であるといった要因も重なっている。美術館は都道府県の中心部にあり，地域から美術館まで１～２時間以上かかるのが普通である。山間部や海沿いの遠隔地の子どもたちが本物の美術と接することには，時間的・距離的な困難を伴う。そこで，美術館の教育普及活動の中で，美術館の作品を学校に移動し，子どもたちや保護者に身近に鑑賞する機会を提供しようとする試みである。三重県立美術館では，鑑賞を希望する作品についての事前アーケートを実施し，岐阜県美術館では，作品の展示に加えて学芸員や教育普及スタッフによる鑑賞教室も開催している。作品の梱包や設営に手間取るので，一度トラックに載せれば県内での移動距離は大きな支障にはならない。ただし，学校には作品展示専用の壁面，温度調節の機能，安全対策のためのスタッフや設備がないので，設営や作品の管理には特別な配慮を要している。美術館の貴重な作品の移動と設営にはかなりの予算や人手を伴っている[2)]。

第三は，少子化や学校の統廃合によって生じた空き教室や学校施設に作品を展示をし，美術館のようにするスタイルである。学校は地域の文化や人々の交流のセンター的な役割をもっていたので，カギがかかったままであったり建物が朽ちてしまうよりも，作品を展示して活用できれば地域にとっても好都合である[3)]。市や町で所蔵していた作品や資料を公開する，地域にゆかりのある作家の作品を展示するといった方法がある。また，都会を離れて自然に恵まれた田舎の環境に作品を設営することを意図的に行うアーティストもいる。アーティスト・イン・レジデンス（美術制作のための滞在）をしながら，廃校においてインスタレーションをする活動も行われている[4)]。

この三つの学校美術館のスタイルは，どれが本流であるか，いずれが優先されるべきかを問うという性格のものではない。学校・美術館・地域の実態に応じて，可能なものから実施できればよい。規模や期間についても，大規模なものにこしたことはないが，継続していくには無理のない規模や期間で行うことが望ましい。

３．学校美術館の創始

学校美術館を早い時期に立ち上げたのは，東京都の杉並区立和泉中学校の美術科教諭であった村上タカシである。1994年に第１回・1996年に第２回を和泉中学校で開催した。村上は廃校ではなく生徒たちが生活し日常的に使用している学校を美術館のようにすることに意味を見出そうとした。そして，第一線で活躍する現代美術のアーティストにも，ボランティアで学校にきていただくように依頼をした。アーティストたちは，普段見慣れた教室・廊下・階段・多目的教室等をギャラリーに変身させた。一般には，現代美術は分かりにくく変わったことをするという印象を受けやすい。ところが感受性が豊かな中学生の時期だからこそ，個性が発揮された現代美術のコンセプトやパフォーマンスを理解で

きる。アーティストも生徒たちがいる中学校ならではの造形活動を展開した。また，名古屋市立千種台中学校の美術教師の四宮敏行も，村上の実践を参考にして，1998年に「学校が美術館－千種台コミュニティープロジェクト－」を開始した。

村上はビデオ記録を公表し，四宮は著書として実践をまとめている[5]。学校は通常の教育活動で使うので現状復帰しなければならない。それだけに映像や文章として活動を残す価値がある。そして，学校美術館の企画や運営についての記録をもとにして，他の地域や学校でも実践が可能な状態にした。アーティスト・地域の人々・生徒たちに働きかけて活動を行い，学校を一般に開放する，社会に情報発信するといった取り組みも評価される。

ただし，学校全体の取り組みとして定着したのかという点については課題が残る。二つの実践とも主に学校休業中の夏休みの教室を使用している。通常の学校の授業日での開催には，運営上の困難があったのであろう。そして，学校そのものが実施する方法からＮＰＯ的な実行委員会が学校施設を借りて行う方法へと移行している。詳細な資料を準備をして学校の会議等で了承を得ていくよりも，目的に応じた人々の集まりの方が活動がしやすいし，スタッフの広がりも期待できる，ただし「学校が美術館」という趣旨からすれば，教職員全体や保護者を中心にした運営も試みたい。

４．岐阜県立関特別支援学校における学校美術館

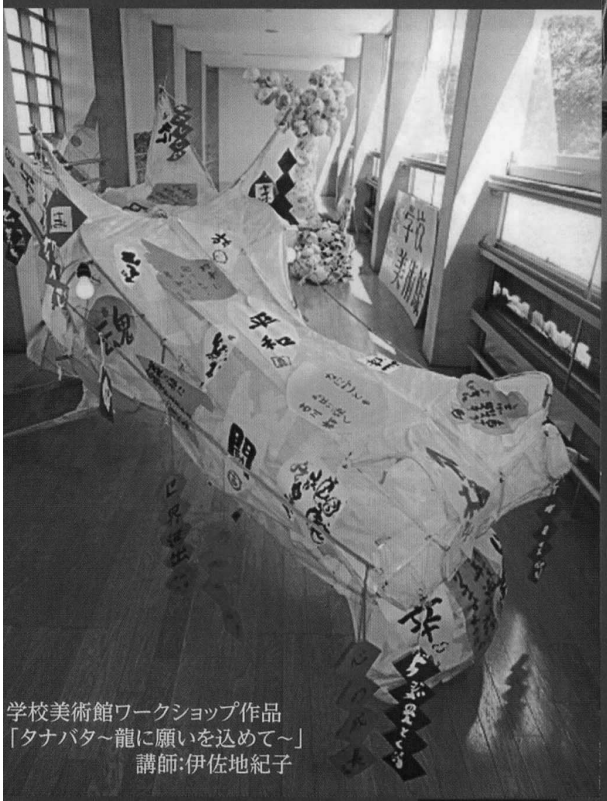
ここでは，実践事例として岐阜県立関特別支援学校の学校美術館を取り上げる[6]。関特別支援学校には小・中・高等部があり，100名程の子どもたちがいる。特別支援教育の充実に伴って10年前に緑豊かな環境に校舎を新築した。校舎は４階建で，窓ガラスの部分を大きく取り吹き抜けも設けて，学校建築として斬新なデザインになっている。採光がよく壁面や廊下が広くなっている。当時高等部の美術科を担当していた土屋明之教諭（現在：関特別支援学校長）が，学校を美術館のようにする学校美術館の企画を発案した。恵まれた教育環境を活用してアーティストや子どもたちの作品を展示したい，そして，障害をもつ子どもたちが学校で本物の美術作品を見ることができる機会を提供したい，という思いから始まった。土屋明之教諭自身も彫刻の作品を制作するとともに，地域の芸術文化の振興のためにボランティア活動を行っていたので，学校美術館の実現に向けて進展した。交流のあるアーティストたちに呼びかけて，校内に美術作品を展示することになった。特別支援学校の子どもたちや教職員の作品も展示した。

学校行事や地域のイベントの中には，企画・運営の中心になるスタッフの転出等によって活動が途絶えてしまうことがあるが，関特別支援学校には小・中・高等部に複数の図工・美術科教員がいて，教職員全体の協力態勢もよかったので，毎年継続されることになった。マニュアル（実施資料）にあたるものを作成して誰でも運営ができるようにする，スタッフの中心となる人材を育成するといったことがポイントになっている。平成24年度には，学校長として土屋明之氏が再び着任し，学校美術館の10周年を迎えることになる。そして，中等部美術科の清水英樹教諭と辻との情報交流の中で，教員養成学部に所属する辻が10名のアーティストの一人として作品展示をし，併せて，学校全体の造形ワークショップを担当することになった。

５．平成24年度の関特別支援学校の学校美術館

24年度の学校美術館の内容を，清水英樹教諭が中心となって編集したリーフレットで示す。

学校美術館 10th



学校美術館ワークショップ作品
「タナバタ～龍に願いを込めて～」
講師:伊佐地紀子

藍川中学校との共同制作によるフラッグアート展の受賞作品

フラッグアート子ども展2012
岐阜県知事賞受賞作品

第10回 学校美術館

平日(授業日)15:30～17:00
一般公開(事務受付)
場所「岐阜県立関特別支援学校」

〒501-3938　岐阜県関市桐ヶ丘一丁目2番地
TEL (0575)22-4238　FAX (0575)22-4239

《作品展示》

招待作家展　2学期：9/21（金）～12/20（木）

〈絵画〉　有賀宣美&韶子・北村武志・後藤裕・大明◎
曽我部弘樹・肥田和明・山田真己
〈絵画&オブジェ〉　小西雅也&千穂・モモMサトウ
〈インスタレーション〉　辻泰秀
〈陶芸〉　川上智子&山岸大祐
〈ガラス〉　林孝子
〈彫刻〉　本校元職員:伊藤茂・菅原光則・宮川達也

●記念行事　9月21日(金)作品鑑賞会 10:00～11:40
●たのしみん祭　10月27日(土)一般公開 10:00～15:00
●ワークショップ　12月中旬実施予定　講師:辻泰秀

児童生徒作品展　3学期：1/8（火）～3/21（木）
児童生徒が制作した作品を展示

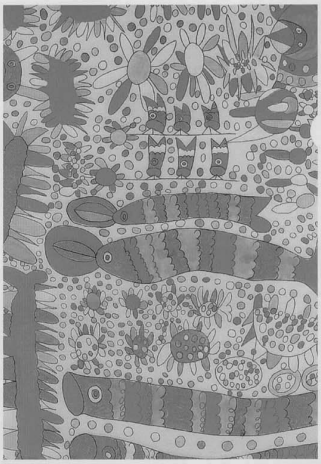
年間を通して
本校児童生徒作品(ワークショップ作品・木の造形作品・あかりアート作品　他)
本校中学部と藍川中学校との交流で制作したフラッグアート作品
本校職員作品展(土屋明之・清水英樹・杉野みや・橋田敦子・中山みずき)

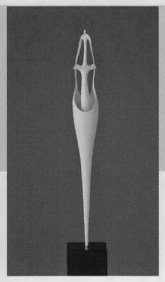
岐阜県立関特別支援学校

有賀宣美&韶子
「泳いでる」

「あなたの人生を
歓喜と名付けて」
母　有賀韶子

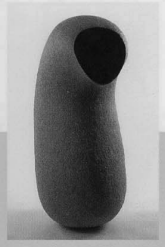
娘、宣美が生まれた翌日、
生命は一週間が山、
おそらくダウン症と。
ありのままに生きていこう。
そして、「歓喜の人生」と
名付けて成長を祈り、
いくつもの壁は、
強く美しい生命の
メッセージです。
今、感謝の日々です。





山岸大祐
「線の行方」

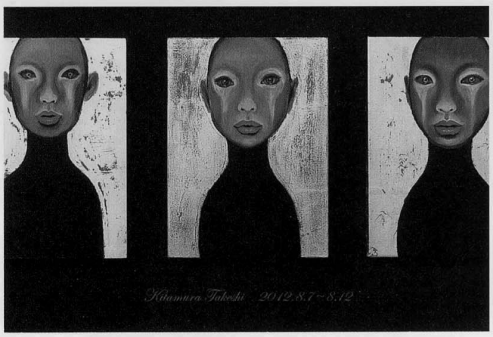
やきものと自分とが関わりあって、
起ち現れてくるカタチから、
何か感じてもらえたら。



現在（いま）を生きる私が
素直に土と向き合うことで
生まれてくるかたち

やきものとして魅力あるかたち

川上智子
「黙 08-02」



人間とは何ぞや?
まずは、自分自身に問うてみる。
描くことによって、見つけられるだろうか?

北村武志
「Pray」

後藤　裕
「トマトケチャップ皇帝」

私自身の特徴を自身で
発言するのは、難しいこと
ですが・・・。
壁画やトレーラーペイ
ント、似顔絵に関しては、
皆様に喜んでいただき、
楽しんでいただけるイラ
ストや絵を描くように心が
けております。

小西雅也&千穂

「星の話しを聞く（千穂）」

「土曜の夜と日曜の朝（雅也）」

二人とも大学を卒業してから途切れることなく、なんとか制作発表を続けてきました。現在は国展を中心に、年に10くらいの制作発表の機会を得ています。

描き続けることの大切さ、人との出合いのありがたさを感じ、いろいろな刺激を受けながら、常に前を向いて作品に向かっていきたいと思っています。

ビニール傘に絵や模様を描いて並べていくと、色と形の“つながり”が生まれます。

地域や社会の中でも、人と人の“つながり”を大切にしていきたい。

辻　泰秀
「カラフル・パラソル」

元職員の作品

伊藤　茂
「1/2CUBE」

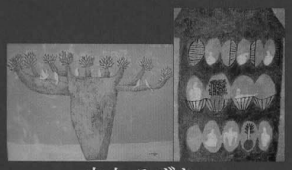
宮川 達也
「伸2012」

菅原 光則
「静寂の影」

土屋 明之
「芽がでた」シリーズ1,2,3

杉野 みや　「名残り」

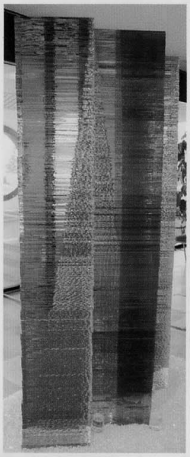
本校職員の作品



中山 みずき
「megumi」　「apartment」

橋田 敦子
「Over the Rainbow」

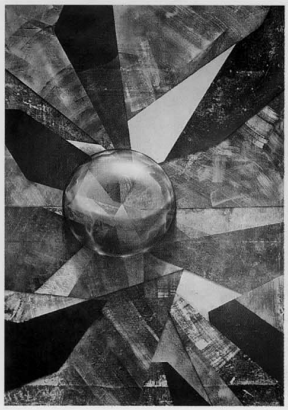
清水 英樹　「波動」



ガラスは人間が創造した
最古のそして莫大な可能性を
秘めた人工の素材である。
鋭利な断面をもち
冷たい表情の硝子に熱を加え
直線を曲線に変え
暖かい表情になる。
板ガラスの主要原料の中に
炭酸ソーダが含まれること
により積層すれば翡翠色?に
見える。
板ガラスにこだわり
雅羅素（ガラス）と・・・・

林　孝子
「雅羅素（ガラス）と遊ぶ」

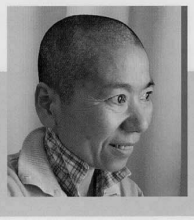
大明◎
「円援永縁」



円満・円熟、
援護・後援たる日々に、
末永く、
ご縁がありますように。

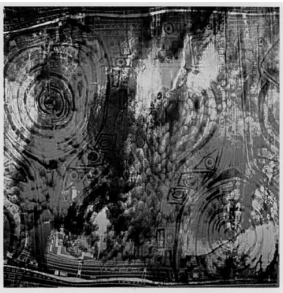
「大明◎」は、
「ひろあきエン」と読みます。
お見知りおきを!

中枢性尿崩症や線維筋痛症などつぎつぎと病魔に侵され入退院を繰り返すなか、フクロウに強い興味を持ち、線画・現代アート・パンパステル画や、詩・即興歌の製作を続けている。



モモMサトウ
「ボレロ」

物事が始まる前の「静寂」。
そして過ぎ去った後の「静寂」。
静寂は常に存在し、
増殖する不条理や闇を
真摯に受け止め、
清新な創造の光明の源となる。
物事には必ず理由があり、
それが結果となる。
そんな静寂の旋律を表現した。



肥田和明
「R-silence」

ごあいさつ

岐阜県立関特別支援学校長　土屋明之

平成14年3月に現在の校舎が完成した時、新校舎竣工記念行事として始まりました「学校美術館」が10回という節目を迎えました。開催にあたり改めて、ご協力をいただきました造形作家をはじめ多数の関係者の皆様にこれまでのお礼を申し上げると共に保護者の皆様には、この活動のよき理解者でありご支援をいただいていることに深く感謝いたします。

振り返れば当校に赴任（平成11年4月）をしたと同時に“光あふれる日本一の学校つくり”を目指して学校建築が始まりました。「明るくて開放された空間」をキーワードに、風を感じ、季節を感じ、人と人との優しい触れ合いを感じ、心の中さえも解放される学校になるよう検討を進めました。

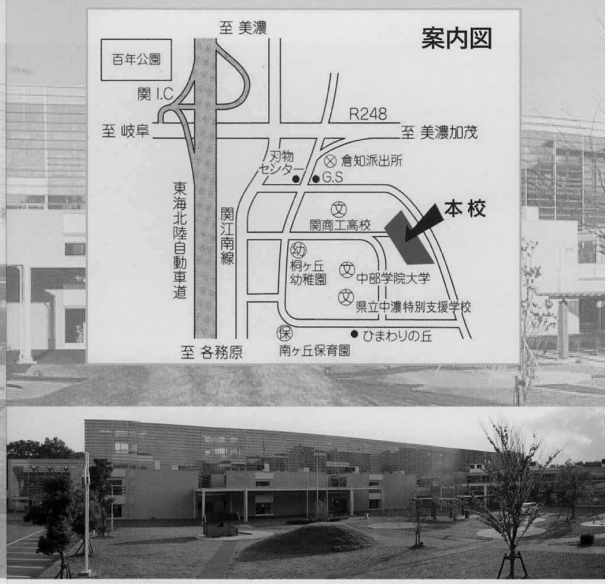
各教室は、開放性の高い開口部により中庭を挟んで廊下と直交し野外空間と一体化となり、高層部は4階までの前面ガラスのある吹き抜け空間を構成することでふんだんに光を取り入れ、各層の廊下からの目線が上下へも広がるようにしました。各階にギャラリーとしての要素も兼ね備えました。

そんな光や風を感じる空間構成の中で、普段の日常の中におもしろいと感じる本物の美術作品に触れることのできる空間（場）を通し、興味関心、意欲そして好奇心旺盛な子どもたちに育つことを期待し“学校を丸っと美術館にしよう”と計画することにしました。

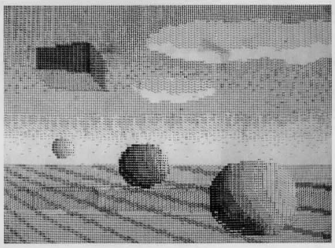
学校は、地域の文化的な核としてさまざまな機能を持つはずですがなぜか閉鎖的な印象があります。一方美術館はもっと開かれているはずなのに一部の人だけの特別な場所であり、敷居の高い所のように感じます。ましてや肢体不自由の子どもたちにとってなかなか気軽に行ける所ではありません。そこでこの2つの思惑を一つにする「学校美術館」を立ち上げました。広く地域の中に開いた教育活動としても意味があることだと思います。

今回も個性あふれる作品を展示することができました。心を空っぽにして作品と対話していただければと思います。当校の児童生徒の皆さん、一つ一つの作品が何かを語りかけています。感じてください。見れば見るほど楽しくなると思います。

10回目の展覧会になりましたが、十分に地域の中に根付いたとは言えません。こうした活動を通し障がいのある子どもも障がいのない子どもも同じ場で共に生きる共生社会の形成のために学校はいろいろと努力していきたいと思います。これからも関特別支援学校へのご支援の程よろしくお願いします。



曽我部弘樹
「浮遊」



学校美術館10周年おめでとうございます。私もこの学校で多くを学び・多くを考え・多くを遊び、その1日1日が今の私を形作っているのだと思います。今回は、学生時代に製作したタイプアートから最近のCG作品まで出展。母校に感謝の気持ちを込め、成長した自分をご覧頂きたく思っています。

山田真己
「希望のひまわり」

私は、水彩画を描いています。
感動した景色、優しく吹く風や、印象深い思い出、またその時の気持ちなどを自由に表現することが、障がいのある自分にとって、大切な自己表現の手段だと思っています。
その風のような自由さは、私の心そのもののような気がします。

本年度の関特別支援学校の学校美術館の概要を改めて記すと以下のようである。

作品展示

招待作家展　2学期　9月21日（金）～12月20日（木）

絵画　有賀宣美＆韶子・北村武志・後藤裕・大明◎

絵画＆オブジェ　小西雅也＆千穂・モモMサトウ

インスタレーション　辻泰秀

陶芸　川上智子＆山岸大祐

彫刻　本校元職員：伊藤茂・菅原光則・宮川達也

記念行事　9月21日（金）　オープニングとしての作品鑑賞会。アーティストによるギャラリートーク

たのしみん祭　10月27日（土）　地域のまちづくり的な行事。隣接する学校・大学を一般に開放する。学校美術館の一般公開。

ワークショップ　12月11日（火）　講師：辻　泰秀　「びっくり万華鏡」。全校が参加。

児童作品展　3学期　1月8日（火）～3月21日（木）

年間を通して

本校児童生徒作品（授業やワークショップでの作品）

本校中等部と藍川中学校との交流で制作したフラッグアート作品

本校教職員展（土屋明之・清水英樹・杉野みや・橘田敦子・中山みずき）

関特別支援学校では10年間にわたって美術分野のアーティストを招いて招待作家展を行ってきた。オープニングにあたる日に招待作家が集い，体育館において全校生徒に自己紹介をする。そして，校舎内の廊下や多目的スペースに展示をした作品を前にしてギャラリートークを実施している。今回は10周年ということもあり，招待作家として障害を抱えながらも作品を制作している5組の作家が参加している[7]。特別支援学校の子どもたちにとって，彼らの生き方を知ったり作品を見ることは励みにもなるはずである。

辻は子どもたちと共に創作活動をする造形ワークショップをライフワークとしている。改めて絵画や彫刻の作品を制作し展示するというよりも，日頃のワークショップの中から出てきたものを展示し，できれば特別支援学校の子どもたちとものづくりを通した交流を深めたいと考えた。1年間程「リレー版画」と名付けた紙版画の全国的な交流プロジェクトに取り組んできたので，紙版画にするプランもあったが，子どもたちの実態に応じることを優先し，「カラフル・パラソル」の作品展示や実践をすることになった。「カラフル・パラソル」は，透明のビニール傘にカラーの油性ペンで絵や模様を描いて飾るという内容である。紙版画の場合には，厚紙を切ったりボンドで貼り合わせる必要があり，手や指に障害をもつ子どもには不向きである。太い油性ペンで自在に色を塗る活動ならば，必要に応じて支援をすれば，多くの子どもが参加できる。以前にも子どもたちを対象にした造形ワークショップにおいて幾度か「カラフル・パラソル」の実践をしたことがあるが，色彩的な描画材料で絵や模様を自在に描くこととから，取り立てて学年・校種や先行経験を問わず，広く造形活動を楽しめる教材であることを理解していた。

ただし，9月からの学校美術館に向けて夏休み中の8月に「カラフル・パラソル」の作品を廊下に展示をしてみたところ，材料の点で学校美術館に際する課題がでてきた。関特別支援学校の廊下には透明の大きなガラスが使用さており，夏には日光が当たり高温になる。長時間にわたって高温の所に

ビニール傘の作品を設置しておくと，ビニールが膨らんで変形してしまう。また，カラーの油性ペンには染料が使われており，直射日光を長期間当てると染料の色が薄くなることがわかった。そのため，直射日光や高温をできるだけさけて，展示する場所や期間について配慮することにした。

ビニール傘の特徴の一つに，透明で光を通すことがある。ビニール傘を透かして絵と回りの景色を合わせたり，地面や壁に色や形を映して楽しむことが可能である。長時間の直射日光は傘の変形・変色の原因になるが，一時的であっても光を通して，色や形のおもしろさを体験したい。

手元には既に「カラフル・パラソル」の作品が80本程あった。大学の教育法関連の授業において学生たちが試作した作品である。通信販売で購入した60cm幅の透明のビニール傘にカラーの油性ペンで描いた。描くときや鑑賞するときに，60cm幅の方が通常の50cm幅の傘よりも手ごたえがある。１本毎の絵や模様を見てどのように描かれているのか鑑賞するのもおもしろいが，色彩豊かな傘が何十本も並んだり組み合わさっている光景が迫力があり魅了される。

他の学校等での「カラフル・パラソル」を持ち込むことに加えて，関特別支援学校の子どもたちの作品も並べた方が親近感がわき好ましいと思われたので，学校美術館に先立つ９月18日（火）に中等部の１クラスの美術の授業として「カラフル・パラソル」の実践を行った。中学生７名がカラーの油性マジックを使用して絵や模様をビニール傘に描いた。それぞれ障害をもっていて，手の巧緻性が十分でないため，思うように描けない様子も見受けられた。けれども，好みの色や形を表現してみたい，描いて楽しみたいという純粋な気持は，むしろ強く伝わってきた。子どもの表現を読み取ろうとしたり，よいところを見つけて積極的に言葉がけをする先生方の姿勢にも感銘を受けた。

９月21日（金）のオープニングでは，体育館において全校生徒を前にして作品について説明する。ビニール傘に絵や模様を描きたくさん並べることや，「カラフル・パラソル」を描いて並べる活動が東日本大震災の被災地の学校の友達へとつながっていくことについて伝えた。全体での紹介の後，校舎内に移動をして各アーティストが作品の前でギャラリートークを行った。作品の説明に加えてその場での造形活動も取り入れた方がよいという考えから，「カラフル・パラソル」の作品の展示場所の付近にビニール傘を30本程準備をして，鑑賞にきた特別支援学校の子どもたちが，見るだけでなく思いのままに描けるようにした。このような体験型の鑑賞は，子どもたちに好評で「傘に絵をかいたのが楽しかった」と感想も寄せられた。アーティストは普通日にもかかわらずほとんど全員が参加をし，子どもたちに語りかけたりアーティスト間で交流を深めた。初対面のアーティストも多いが，ボランティアで学校美術館に参加をする人々は，優しく感性が豊かな方であることが理解できた。同じ地域で創作活動にかかわっていると，知人関係や活動内容について多くの接点があることもわかった。

「カラフル・パラソル」は，直射日光に留意しながら12月まで展示をし，その途中で各地に「出前」をした。９月に愛知県飛島村立飛島小学校，10月に愛知県豊明市立双峰小学校，11月に福島県いわき市立大浦小学校に移動をして，それぞれの地域の子どもたちが「カラフル・パラソル」を描き，岐阜の子どもたちや学生の「カラフル・パラソル」と一緒に並べた。各地の子どもたちを結び付ける手紙やリレーのバトンの役割を「カラフル・パラソル」がはたしたことになる。各地域の学校において，関特別支援学校の子どもたちが手を動かして一生懸命に描いたことや，福島の子どもたちが津波や原発の被害にあいながらも家族や友達との絆を大切にして頑張っていることを伝えるようにした。

６．学校美術館におけるワークショップ－「びっくり万華鏡」の実践－

学校美術館の招待作家展の終盤にあたる12月11日（火）に全校の子どもたちを対象にしたワークショップを行った。学校美術館の招待作家のうち１名が子どもたちと造形活動を行うことが近年の通例になっている。大学の地域貢献として学校や社会教育施設への出前授業を毎月のように行っていることもありお引き受けした。ただし，どのくらいの人数が参加するのか，どのような障害をもつのか，いかな

る内容のワークショップが望まれているのかについての事前の知識もないまま実施することになった。その後，清水教諭との打ち合わせの中でわかってきたことは，

①特別支援学校の小・中・高等部の子どもたちがほぼ全員参加をする。発達や障害の状況においてかなりの個人差がある。

②知的障害や手の不自由な子どもが，複雑な用具を使ったり技能を伴うような活動をすることはできない。

③当日は学校美術館の実践に対する岐阜ユネスコからの表彰が予定され，健康状態に不安がある子どもがいることから，１時間程度の活動になる。

この①～③を考慮した結果，「びっくり万華鏡」[8] と題する教材を選択した。通常の万華鏡は円柱状の筒の中に三角形の筒が入っており，その三角形の筒の内側に貼り付けられた反射板にいろいろな模様が写るしかけになっている。筒の中を穴から覗く仕組みで，複数の人が同時に万華鏡を見ることはできない。今回の「びっくり万華鏡」では，２Ｌ入りのペットボトルや大きな三角柱の鏡を使う。ビデオカメラと液晶プロジェクターで三角柱の内側の鏡面に写ったペットボトルの映像をスクリーンに拡大するので，多人数で一緒に鑑賞することができる。ペットボトルの中に光を当てるとキラキラしそうなビー玉や色セロハンなどを入れるだけでよい。はさみで切ったりボンドでくっつけるという活動がなく，特別支援学校の子どもたちが手軽にできる。当日までにペットボトル，色セロハン，ビー玉，油性マジック，ビデオカメラ，液晶プロジェクター，三角柱になった鏡，懐中電灯，スクリーンを準備をして，体育館の５ケ所のコーナーで，子どもたちが万華鏡の映像を鑑賞できるようにした。

また，会場となる体育館には，学校美術館がはじまった９月以降に実践した愛知県や福島県の子どもたちの100本余りの「カラフル・パラソル」の作品も展示をした。この日の実践等については，スタッフとして参加をした林と新實によるレポートを通して報告する。

（1）スタッフ１：林和貴子のレポート

学校美術館の試みとして学校に美術作品を展示し，子どもとの交流を図ってきた。ちなみに関特別支援学校では９月から学校美術館を開き，そのオープニングとして作家を呼んだ展示会を行った。作家が子どもに直接自身の作品解説を行うことで，作家の作品に込めた思いと子どもたちが感じたことの交流ができた。そして今回，関特別支援学校での学校美術館の締めくくりの位置づけで，子どもを交えた参加型造形活動として「びっくり万華鏡」が行われた。学校全体で美術と関わることの可能性や意味を「びっくり万華鏡」の活動を振り返ることで検討したい。

「びっくり万華鏡」の活動

・手順

まず，「びっくり万華鏡」では水を入れたペットボトルにセロハンやビー玉，ビーズのような光を通すようなものを入れる。そしてそのペットボトルを三角に鏡を合わせた万華鏡の口に置き，ペットボトルの後ろからライトで照らす。その反対の口にビデオカメラを設置し，液晶プロジェクターにつなぐ。その映像が液晶プロジェクターからスクリーンに映し出される仕組みである。作品の残し方としては，スクリーンに映った映像を写真に撮る，またはビデオカメラで直接映像を撮る方法がある。

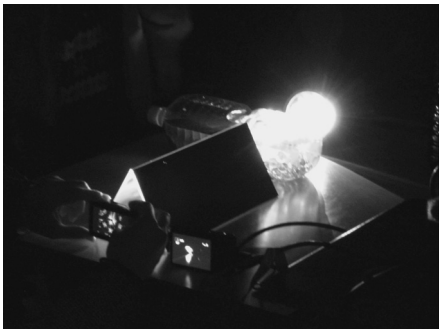


図１「びっくり万華鏡」の仕組み
ペットボトルに光をあてて，三角柱の鏡にうつす。

・万華鏡の見え方

万華鏡を通して映し出された映像は，キラキラと輝きペットボトルを動かすたびに様子を変えていた。スクリーンに大きく映し出されるため，ビデオカメラを通して作品がスクリーンに映った瞬間に歓声が聞こえるほど美しく迫力があった。ペットボトル自体のデコボコ・セロハンの色・ビーズに光があたって，様々な色や光によるキラキラとした模様を見ることができた。

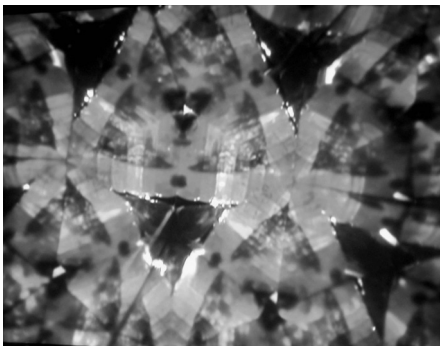


図２　スクリーンに映った様子

・子どもの反応

初めに手順を説明した後に，導入として天井に「びっくり万華鏡」を映されると，子どもたちから歓声があがった。それぞれの子どもたちの活動が始まると，すぐにセロハンやビーズ，ビー玉が配置されているテーブルに集まり，自分の用意したペットボトルに材料を詰めていった。セロハンはハサミを使わずに手でちぎることができるので，気楽に自分好みのものをつくることができていた。また，絵の具の色水をペットボトルに入れて水に色をつける子どももみられた。用意された材料の中から，子どもたちは自分の好む色や形のものを選び，主体的に活動していた。

図３　材料をペットボトルに詰める様子

ペットボトルに光を通す材料と水を詰めるだけで，水の中で色セロハンやビー玉が美しくキラキラと輝く。それ自体が作品のように感じられた。子どもは嬉しそうに自分のペットボトルを見ながら，このペットボトルを万華鏡に通すとどうなるのだろうという期待に目を輝かせていた。実際に液晶プロジェクターでスクリーンに映し出されると，ペットボトルを回転させ色々な角度を試すことによって，美しく見える方向や瞬間を探し，様々な模様を発見した。自分で材料を詰めたペットボトルが万華鏡を通すことでより魅力を増し，想像もつかなかった模様をつくり出すことを楽しんでいた。

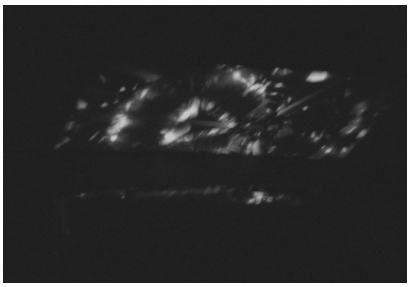


図４　天井に映し出した様子

・活動中に見られた工夫

今回見られた工夫は液晶プロジェクターを使った万華鏡の見せ方と，万華鏡に対するペットボトルの置き方についての２点が挙げられる。

まず液晶プロジェクターを使った万華鏡の見せ方である。今回は液晶プロジェクターを５台使い，４台はスクリーンに１台は体育館の天井に映し出した。スクリーンに映し出す方法で大きな万華鏡の模様を大勢で鑑賞し，お互いの作品を交流することができた。さらに，天井に映し出したことにより，スクリーンの時とは違う効果を得られた。それは天井に映し出したことで，上を見上げれば作品を見られるようになったため，車椅子の子どもにも見やすくなったことである。また，みんなで夜空を見上げているような気分になれたという声もあった。見せ方によって作品を違った印象で楽しむことができることがわかった。

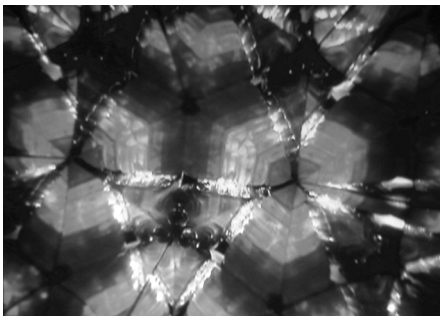


図５　ペットボトルを２つ置いた万華鏡

次に，万華鏡に対するペットボトルの置き方である。万華鏡の口にペットボトルを２つ置く姿が見られた。２つ置いたことで，色数が増えその２つの差が映し出された作品の中で融合し合い美しい模様を作り出していた。１つの時以上に何通りも違った模様をつくり出すことができた。２人で１つの作品を作り出すことになり，子ども同士での交流も広がると考えられる。

「びっくり万華鏡」の活動のよい点は，身構えることなく作品をつくり出すことができ，作品を全体で即座に鑑賞し交流し合えることである。ペットボトルに色セロハンなどの材料を詰める場面でも，セロハンをちぎるので，ハサミの使い方等の技術が関わらない。そのためハサミを使うことが困難な子どもでも，自分で材料をつくりペットボトルに入れることが可能である。そして，仕上がった作品をスクリーンや天井に映し出すことによって，その場にいる大勢の人と作品を同じ空間で共有できる。ペットボトルを動かすと様々な模様がつくり出される。その変わる姿を鑑賞し交流することで，自分と違った価値観や表現方法を理解することにつながるのではないだろうか。

また，スライドを使った映し出し方の違いやペットボトルの置き方の工夫で，より一層「びっくり万華鏡」を楽しむことができた。

学校美術館の活動を通して学校全体で美術と関わることができ，子どもたちも美術を身近に感じられるようになったと考えられる。「びっくり万華鏡」では，普段は体育や集会を行う体育館が万華鏡の光で溢れるといった体験をした。まるでいつもの体育館が美術館になったように感じられる。学校美術館を行うことで，美術館になかなか行くことがない子どもたちに，美術館に行く以上に美術を身近に感じられる機会になったのではないだろうか。学校という子どもにとって身近な場所で，自然と作品が目に入ることや，自ら作品制作を体験し美術と触れ合うことで，美術の面白さや楽しさを感じ取ってほしい。

（２）スタッフ２：新實広記のレポート

岐阜県立関特別支援学校では，今年で10回目になる学校美術館が行われた。校舎には，作家の絵画や彫刻などが展示され，これらのアート作品が生徒たちの日常の風景を変化させ，新たな空間を作り出していた。

その会期中に，ペットボトルを使った万華鏡制作のワークショップを行った。これは水性絵の具やガラス，カラーセロハンなどを水の入ったペットボトルに入れ，万華鏡レンズを通してプロジェクターで映し出すという活動であった。この活動を通して，美術を身近に感じながらさまざまな表現手段があることを知り，造形活動や鑑賞を楽しむことを期待した。

今回は，ペットボトルに材料を入れるのみのごく簡単な作業であったが，生徒たちの体よりも遥かに大きなサイズの作品ができあがったため，自分の作った光の模様が体育館の天井やスクリーンに大きく投影されたのを見た生徒たちからは，歓喜の声が上がった。自分の作った作品が広い体育館の空間に広がったことで，生徒たちの心の中にある感情が外に大きく表現されたような印象を受けた。

また，生徒の作品を高い天井に映し出したことによって，普段何気なく見ている体育館の天井がプラネタリウムのような宇宙空間に変化したことはとても新鮮であったようだ。作品を展示する上で空間に対する視点は，作品制作と同様に重要な要素になる。校舎に展示されている学校美術館の作品の中にも，建築の特徴を生かして，高い天井から空中に吊り下げられている作品や窓から差し込む光を効果的に取り込んだ作品の展示も見られた。このワークショップでも大きな空間が自分の制作した作品で普段とは違う非日常の空間に変えてしまえる力があることを体験できたようだ。

鑑賞の視点からも，生徒同士や教員との興味深い関わりが見られた。通常の万華鏡は，一度に一人しか穴を覗き込めず，同じタイミングで同じ模様を仲間と鑑賞することが難しい。しかし，今回のペットボトルの万華鏡は，模様が外部に大きく映し出されるため，全員で一緒に鑑賞することが可能にな

り，それぞれの模様の違いを楽しんだり，共感したりすることができた。「できた！できた！」と自分の作品を見て喜びを伝えていた生徒や，模様に対して「優しい色」「おいしそうな色」「怖い色」「寂しい色」など色の雰囲気から感じる言葉を教員と交わして鑑賞していた生徒もいた。「お花のようだね！」「海の中みたいだ！」「こんな模様の服があったら着たいね！」「この色合いはクリスマスみたいだね！」などと，具体的な事象に置き換えて会話をしている様子もうかがえた。また，より美しく模様が映し出されるように友達のペットボトルと組み合わせたり，ペットボトルに入れる材料の色や形を工夫したりする生徒もいた。さらに，手や足が不自由なため，教員にペットボトルを動かしてもらいながら，自分の好きな模様が映し出される位置を探し，その作品と一緒に写真を撮っていた生徒も見られた。

特別支援教育の中では近年「支援」という言葉が使われることが多くなったが，現場の様子からも，教員の考える目標に生徒を引っ張り上げようとするのではなく，一人一人の障害の程度や興味，関心に合った「支援」を受けながらワークショップに参加していた。また生徒の障害の程度によっては，「絵は思い通りに描けないから」と，描くことに抵抗を感じている場合が少なくないようだ。だが今回のワークショップの内容では，思い通りに「描く」という動作が求められるものではなく，自分の表現をすることができた。障害が異なる生徒が共同で行っても技術的な問題が少ない教材の提供であった。またワークショップでは，活動の幅が広がるように，体育館の数カ所にテーブルを配置し，ペットボトルに入れるいろいろな材料を並べた。これは，生徒が車椅子に乗ったまま，自分で好きな材料を選べるようにするためであった。さまざまな材料を教員やワークショップのスタッフに質問しながら選んでいた様子から，生徒自身による選択，自己決定のもとで万華鏡ができ，その模様には本人の「納得」が生じていたように思われた。

生徒たちは，今回のワークショップを通して，美術には，絵画や彫刻だけでなくさまざまな表現方法があることを体験できたのではないだろうか。自分の作品を広い体育館に大きく映し，仲間と表現の喜びを共有できたことで，生徒たちには大きな達成感と満足感が生まれたようで，とても良い表情を見せてくれた。美術は「使う物や飾る物」のように用途に応じた作品を作ることだけが目的ではない。目には見えない心を，造形表現や鑑賞を通して視覚的に認識できるようにすることも，一つの活動である。学校美術館や今回のワークショップの取り組みを通して，特別支援学校の生徒が美術を身近に感じ，多様な美術表現の中から自らを表現する喜びを見つけていくことにつながった。

7．おわりに

本稿の共同の研究者である辻・清水・林・新實の４人は，世代や勤務先が異なり学校美術館の中で出会った。辻と清水とは岐阜県美術館の美術館と学校との連携を考える研究会で知り合い，美術教育の実践研究に取り組んできた。岐阜大学の大学院教育学研究科において彫刻の制作をしている林は，高等学校のときの社会科の恩師が偶然に関特別支援学校に勤務されていることもあって，今回の学校美術館のギャラリートークやワークショップの実践に加わった。そして，新實は愛知県の大学でガラス工芸の制作をするとともに，ものづくりの教育実践に取り組んでいる。辻とは「ものづくり教育会議」と称する研究会で共に活動してきたが，たまたま愛知県の飛島村立飛島学園での学校美術館での会場設営の際に辻・清水・新實が一緒になり，清水の勤務先である関特別支援学校でのワークショップの実践にも加わった。

このように学校美術館におけるギャラリートークやワークショップの活動がきっかけとなって，人のつながりが培われた。もちろん子どもたち・教職員・学校美術館に参加されたアーテイストの皆さんとも一緒に造形活動をしたり対話をしながら交流することができた。学校美術館は一つのアートのイベントであるが，学校美術館の開催に伴っていろいろな人が集まり，教育の成果を着実に残してい

る。かかわった一人ひとりに「一緒になって活動をする」「対話をする」「交流を深める」「つながりをつくる」という，生きる上で必要な貴重な経験を学校美術館はもたらしている。

注

1）武蔵野美術大学では，三澤一実教授がコーディネーターになって「旅するムサビ」というテーマの学生たちの出前形式の鑑賞教室を実施している。美術教師を志す学生たちが自分の作品を学校に持ち込んで子どもたちに語る経験は，学生たちにとっても地域の子どもたちにとっても大切である。

2）経済状況の低迷は自治体の税収入や美術館の予算に影響を与えている。美術館の貴重な作品の移動と設営には多くの予算や人手を必要とするので，移動美術館は縮小の傾向にある。

3）地方の自治体が廃校を活用して子どもたちの美術館をつくった代表的な事例として兵庫県篠山市にある篠山チルドレンズ・ミュージアムがあげられる。ここでは，専任の教育スタッフがいて子どもたちの創作活動を支援している。目黒実『学校がチルドレンズ・ミュージアムに生まれ変わる－地域と教育の再生の物語－』（プロンズ新社　2002）を参照。筆者も岐阜県美濃市の旧片知小学校において「美濃市子ども創造館」というチルドレンズ・ミュージアムに属する試みを行っている。

4）新潟県の山村で広域的に行われている「大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ」では，展示場所として学校や空き家が使用されることが多い。学校は長年にわたって地域の子どもたちが生活をしていた場所であること，教室や体育館など比較的広いスペースを使えることが理由である。日比野克彦は旧莇平小学校の校舎の外壁に朝顔を育てるプロジェクトを展開した。北山善夫は旧清津峡小学校の体育館の天井から紙と竹でつくった巨大なオブジェを吊り下げて展示をした。

5）村上タカシ（現在，宮城教育大学准教授）の「IZUMIWAKU PROJECT」については，ビデオでの記録が『IZUMIWAKU　Video 1944』（リメックス）として公表され，美術館教育に関する文献（「公立中学校が，現代美術館に変わる」『ドーム』VOL.20　日本文教出版　1995.）で取り上げられた。「泉湧く」という創造的なイメージと，地名の「和泉」とを重ねた名称になっている。名古屋の千種台中学校での学校美術館については，四宮敏行『学校が美術館』（美術出版社　2002）に詳細に示されている。

6）特別支援教育で造形教育が役割をもつことについては，既に特色のある実践事例が示されている。たとえば陶芸家の西村陽平は，勤務先であった千葉盲学校において優れた粘土の実践を行っている。目の不自由な子どもたちが触覚をいかしたダイナミックな粘土表現をした。

7）何人ではなく何組と記すのは，移動や作品展示に伴い常に支援が必要なアーティストがいることによる。

8）「びっくり万華鏡」という名称は，スクリーンに拡大して鑑賞することから辻がつけた。この教材は岐阜大学附属小学校の図画工作科の教諭であった鎌宮好孝が開発をした。美濃市文化会館の舞台上の映画スクリーンに映し出す実践を辻と共同で行ったことがある。教材内容については，辻　泰秀「びっくり万華鏡をつくる－光のアート－」（水上喜行・樋口一成『造形教材』愛知教育大学出版会　143-144頁）を参照。三角形の筒は，長方形にカットした鏡状の板を3枚用意して端を接着したものである。水と色セロハン等の入ったペットボトルを動かしたり懐中電灯をあてる角度を変えると万華鏡の模様が変化する。鏡の中やスクリーンの映像をデジカメやビデオカメラで撮影することで，映像メディア表現の作品にすることができる。

付　記

学校美術館での展示・ギャラリートーク・ワークショップ等に際して，岐阜県立関特別支援学校の教職員や子どもたち，参加アーティストをはじめ多くの皆様にご協力いただきました。厚く感謝申し上げます。